



Data

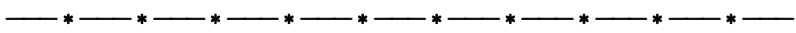
監督：マリウス・ホルスト

出演：ステラン・スカルスガルド／
ベンヤミン・ヘールスター／
クリストッフェル・ヨーネル
／トロン・ニルセン／モーテ
ン・ロープスター／ダニエ
ル・ベルグ／オーディン・ギ
ーネソン・ブローデル／マ
グナル・ポッテン／マグヌ
ス・ラングレーテ

👁️👁️ みどころ

1915年にノルウェーの孤島の少年矯正施設で起きた「スパルタクスの反乱」ならぬ少年たちの反乱とは？ 刑罰の本質は応報刑？ それとも教育刑？ そんな議論を踏まえて、この「史実」を見れば、大いに勉強に！

それにしても、歯がゆいのはあっけない鎮王。少年たちの戦略性のなさは責められないが、これでは反乱はムダ骨？ いやいや、そうではない。そんな教訓と感動は、しっかりあなた自身の目で。



■□■映画なればこそ、こんな歴史上の事実に光を！ ■□■

ノルウェー政府は1898年に、非行少年の矯正施設を設立するためにオスロ市南方75 km (ホッテン市沖合4.3 km) にある面積2.23 km²のバストイ島を購入し、1898年に合計150人の少年を収容できる5つの寮を建設したらしい。少年に対する刑罰として「応報刑」が妥当か？ それとも「教育刑」が妥当か？ という議論は有名だが、第1次世界大戦前後のヨーロッパでは、教育刑的観点が主流で早期の矯正によって青少年期の問題に起因する未来の非行を防止できる、と考えられていたらしい。ところが、その実態は？

ノルウェーのAMANDA AWARDS 4部門を受賞するなど、2010年の「ノルウェーを代表する1本！」と絶賛された本作は、そんなバストイ島の少年矯正施設で1915年に起きた「少年たちの反乱」と、そのあっけない「鎮王」という歴史上の事実に光を当て、問題点をえぐり出していくもの。成人を対象とした刑務所とバストイ島の少年矯正施設はその設置目的が違うと再三説明されるとおり、たしかにここには武器を持った警備員は存在しないし、捕虜収容所のような手錠や足かせも原則的に使用されていない。そ

うだとすると、「スパルタクスの反乱」のようなリーダーさえいけば反乱は容易？私はずっとそう思いながら本作を観ていたが、1915年に実際にそんな反乱が起きたわけだ。しかし、反乱を起こすのは容易でも、難しいのはその後の処置や構想の立て方？本作のタイトルは『孤島の王』だが、さて歴史上の事実とは？

■□■ 3人の主役たちの個性の強烈さに注目！ ■□■

本作ではバストイ島非行少年矯正施設の院長を演ずるステラン・スカルスガルドの顔に見覚えがある。彼は『メランコリア』（11年）や『ドラゴン・タトゥーの女』（11年）等で有名なスウェーデン生まれの俳優で、その重厚な演技は本作の出来を引き立てている。その部下として長年忠実に働いているのが寮長のブローテン（クリストッフェル・ヨーネル）。院長は若い妻と一緒に生活しているが、彼はこの孤島で一人暮らしだから、その大変さはかなりのものらしい。そんな大変さは、少年たちに対してどのような行動に？またその後には判明してくる彼の醜聞とは？

本作の主人公は、この島に送られてくる非行少年のエーリング（ベンヤミン・ヘルスター）。相手を睨みつけるようなギラギラした鷹のような目は、いかにもこの少年の悪性（？）を示しているが、そうだからこそ、その存在感はタップリだ。本作冒頭には、3本の銛を打ち込まれてもおお24時間死なないで大海を泳ぎ回ったという巨大な鯨の物語がナレーションで語られる。こりゃハーマン・メルヴィル作の『白鯨』のお話？と一瞬錯覚しかけたが、実はこれはエーリングが語る体験談というから面白い。彼はここに閉じこめられるまで、どこでどんな体験を？そして、この冒頭の物語は本作のストーリー形成といかなる関係を？ラストになれば、これこそが本作全体を貫くストーリーの主題であることがわかるが、この少年はこんな意外な文才を一体どこで手に入れたの？

本作ではまずはこんな個性的な3人の男たちに注目だが、さてエーリングがたくさんの非行少年たちの中に入ってみると・・・。

■□■ 収容少年たちの友情と信頼は？反発は？ ■□■

脱出不可能を売りとしたバストイ島の少年矯正施設に送られてきたエーリングは、出所間近となっている優等生のオーラヴ（トロン・ニルセン）から「俺がいる間はおとなしくしてろ」と言われたにもかかわらず、入所早々脱出計画を練り、それを実行したからオーラヴは迷惑千万。しかし、失敗しても失敗してもあきらめず、脱出のチャンスをうかがうエーリングに対してオーラヴが次第に尊敬の眼差しを向けていく中、2人の間にはいつの間にか固い友情と信頼が・・・。

『人間の条件』6部作（59～61年）（『シネマルーム8』313頁参照）では、兵舎の中で古参の上等兵からいびり倒される棍たち初年兵の姿が何度も描かれていたが、本作ではC棟内での少年たちの監視状況が再三描かれる。院長もブローテン寮長も一見それなりの理念にもとづいて非行少年たちの矯正に励んでいるように見えるが、実はその裏では・・・？官僚たちのやることは古今東西どこでも同じだということがよくわかる。収容者が150人もいれば気の弱い奴、体の弱い奴もいるもの。『人間の条件』では田中邦衛演

じる小原二等兵がそんな役を演じていたが、本作におけるそれがやせっぽちの内気な少年イーヴァル（マグヌス・ラングレーテ）。脱出しようとするエーリングを見て、イーヴァルは「一緒に連れて行って」とせがんだが、エーリングはそれを一蹴してしまったから、いったんは成功したかに見えたエーリングの脱出劇は？

本作では、このイーヴァルがブローテン寮長から性的虐待を受けていることが判明したことをきっかけに、寮内の緊張感が一気に頂点に達していく。オーラヴからの直接の訴えを聞いた院長はさすがに何らかの手を打たなければならないと考えたようだが、そんなこんな動きの中、少年たちの間に生まれる友情と信頼は？そして反発は？



『孤島の王』 一部劇場にて公開中 配給・宣伝：アルシネテラン © les films du losange

■□■少年たちの反乱のきっかけは？■□■

我慢に我慢を重ねて、今日は晴れてオーラヴの出所の日。ところがその日オーラヴが目にしたのは、「あの事件」によってクビにされたはずのブローテン寮長が島へ復帰してくる姿だった。イーヴァルへの性的虐待の犯人＝イーヴァル自殺の要因となった加害者は処罰されたのではなかったの？猛然と院長に抗議しようとするオーラヴを、ここではエーリングが止め役に回ったのは皮肉だが、怒りを押さえきれないオーラヴはブローテン寮長に対して殴りかかったから事態は最悪に。ここから自然発生的に起きるのが本作のクライマックスとなる「スパルタクスの反乱」ならぬ、少年たちの反乱だ。

今オーラヴとオーラヴを助けたエーリングは懲罰棟に入れられていたが、院長のやり方に不満を持つ1人の看守が援助の手を差し伸べたのが反乱の発端。見回りに来たブローテン寮長を思いきり痛めつけて鍵を奪い、懲罰棟から脱出したエーリングとオーラヴに呼応

するかのように寮生たちが一気に牙をむき始めたわけだ。若い少年たちの体力と数を集約すれば、警棒を持っただけの数人の警備員の抵抗など知れたもの。たちまち少年たちは建物に火をつけ、ブローテン寮長を縛り上げ院長にまで迫ったが、その最終処置は？こんな事態になれば当然エーリングとオーラヴがリーダー的役割を果たすことになるが、エーリングとオーラヴはブローテン寮長に対して、そして院長に対してどんな処置を？

■□■自然発生的な反乱の限界は？■□■

本作は史実を基にした映画だから、大切な部分に変更していないはずだが、私に言わせればエーリングたちのこの処置は不十分。というより、この処置は一方ではしっかりした戦略にもとづいたものではなく、他方では高揚した気分のままの処置でもなく、いわば大人と子供の判断が中途半端に入り交じったものだ。さらに問題は、反乱後の対応策（戦略）。つまり、バストイ島における非行少年たちの反乱のニュースが政府に伝われば、鎮圧部隊が押し寄せてくることは必至。それに対して少年たちはどう対応するの？

武力で対抗することなど到底不可能だから、少年たちが求めるべきは①院長とブローテン寮長の不正の糾弾と再発防止②矯正施設内における待遇の改善等々だが、そんな交渉をやるための段取りは？残念ながらエーリングにもオーラヴにもそんな知恵はなかったらしく、今少年たちの目の前には何と巨大な軍艦が。そして、そこから上陸してきた正規兵たちは……。これでは、「スパルタクスの反乱」が脚座に鎮圧されたのと同じように、少年たちが赤子の手をひねるように逮捕されていくのは必然だ。こんな姿を見ていると、少年たちの幼さ、拙さが少し情けなくなってくるが……。

■□■少年院や刑務所のあり方は？■□■

本作のラストは1匹のトナカイの出現によって、全然予測しなかった方向に進んでいく。銃を持って押し寄せてくる軍隊の前に少年たちは1人また1人と逮捕されていったが、エーリングとオーラヴは……。？この1匹のトナカイの出現は何を意味するの？それを直感的に理解したエーリングは、足に傷を負ったオーラヴを助けながら、懸命に氷の中を本土に向かって歩き始めたが……。ここから先の展開はあなた自身の目で確認してもらいたい。このバストイ島における少年たちの反乱が権力者の目からの歴史ではなく、不正と暴力の矯正施設として描くことができたのは、ここで少年時代を過ごした男たちの発言があったからだ。

「懲罰施設」と化していたバストイ島の矯正施設が閉鎖されたのは1970年。そして、1988年以降はバストイ刑務所として使用されているらしい。刑罰とは何かという分析はイコール少年院や刑務所はどうあるべきかという議論に結びつくが、バストイ刑務所はエコロジー、人道主義、責任感の育成を3本柱とする世界初の人間生態学的な刑務所として知られているらしい。「スパルタクスの反乱」はその後のローマに何をもたらしたのかを考えるのと同じように、バストイ島における少年たちの反乱は、その後のノルウェーの少年院のあり方に何をもたらしたのかについて、本作を契機にじっくり考えてみたいものだ。

2012（平成24）年5月16日記